Ｎｏ．２４３【２０１７年１月２７日配信】
縄文土器の形や文様（担当：児玉）

皆さん、こんにちは。文化財課の児玉です。私ごとですが、5年ほど前から子どもを対象とした体験学習のボランティア活動に取り組んでおり、最近では小学校の特別支援学級の子どもたちに出前授業として「縄文土器作り」などを教えています。

子どもたちの土器作りの様子を見ていると、同じ量の粘土を取り分けながら作っているのですが、できあがった土器の形や大きさは全く異なっており、文様もバラバラで、個性が強く表れています。

一方、縄文人が作った本物の「縄文土器」は、一定の規則性のようなものが存在しています。およそ1万年にもわたる縄文時代では、その間、日本各地で様々な土器が作られますが、初めの頃は底の尖った「尖底（せんてい）土器」が作られ、やがて底が平らなものがほとんどになります。縄文時代中期には、中部地方と東北地方を中心に、手の込んだ複雑な土器が作られ、簡単な形と文様が多い西日本との違いが見られます。このように縄文土器は、時期や地域によって似たような特徴をもっており、その移り変わりを目安にして、縄文時代は草創期（約15,000～約9,000年前）・早期（～約6,000年前）・前期（～約5,000年前）・中期（～約4,000年前）・後期（～約3,000年前）・晩期（～約2,400年前）の6つの時期に分けられています。

縄文土器の表面には、土器の名前の由来にもなった、縄で付けた文様が多く見られます。文様の付け方には様々な方法があり、よった縄を転がすように押し付けたもの、棒に紐（ひも）を巻きつけて転がしたもの、貝殻や木などを使ったもの、細い粘土紐を貼り付けたものなど、それぞれ違った文様が生み出されています。

また、縄文土器に様々な形がある理由には、作られた時期や地域の違いによるもののほか、土器の使い方の違いにもよります。最も多く作られたのは、食べ物を煮るための深鉢（ふかばち）です。土器の外側に、食べ物が吹きこぼれて焦げたあとが残っているものも見つかっています。貝を煮てスープにしたり、ドングリを煮て苦みを取り除いたりするほか、水や食べ物を保存しておく「かめ」としても使われたことでしょう。「煮る」ために使われた深鉢に対して、浅鉢（あさばち）は食べ物を「盛る」ために使われていました。また、注ぎ口が付いた「注口（ちゅうこう）土器」も見つかっています。これらは日常生活のほか、特別な祭りや儀式の際にも使用するなど、用途に応じて使い分けていました。

青森市内から出土した土器は、「縄文の学び舎・小牧野館」において時期別に並べて展示していますので、縄文土器の移り変りや用途について理解を深めていただければと思います。

縄文の学び舎・小牧野館の縄文土器の展示室